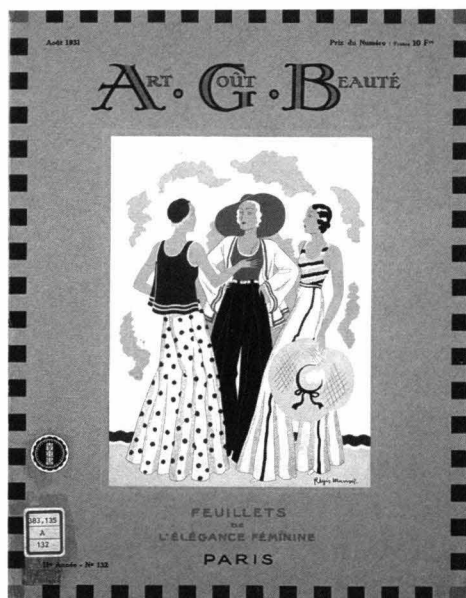


Art · goût · beauté : feuillets de l'élégance féminine

(アール・グー・ボーテ)

Paris : Albert Godde, Bedin, 1921—1933

Hiler p.46



1931年8月号表紙 海浜着のデザイン

本誌は多くのすぐれたイラストレーターから支持されてできた最後の“いき”な雑誌だとされている。「芸術と趣味と美しさ」もしくは「芸術と趣味と上品さ」という意味のタイトルで、通例A.G.B.と略記されるのはタイトルと出版社名のA. Godde, Bedinとを兼ねたものであろう。1921年秋号までのタイトルの末尾は bon ton であるが、冬号以降は beauté に改められている。

本誌のユニークさは、まず冊子の形式に現われている。「女性の優しさのフィエー (Feuillets de l'élégance féminine)」という副題が示すように、刷った全紙を四つ折りのままでとじることなく表紙をつけ、紐がけしたもので、毎月8枚、つまり1帖分の16ページ仕立てというのが基本になっている。この形式は当時としては破格であり、わが国でも表紙のデザインや中身の一部を模倣した婦人誌が早速現われた。

国際情報社によって1924（大正13）年から1928（昭和3）年まで刊行された「婦人グラフ」がそれで、この雑誌は当時モダニズムの象徴として話題を呼んだ。竹久夢二作の木版画などが、他の色刷挿絵とともに紙面に貼り込まれているので、今では古書展でも予想外の高値を呼んでいる。

もちろん、手本となったA.G.B.が数等もエレガントでほれほれする程のでき栄えなのは、当時の一級の挿絵画家H. ルーイ (Rouit) が美術ディレクターを務めているからである。彼はしばしば自らの挿絵を別刷りにして誌面のあちこちに貼り込んだ。そして、これらには必ず Art goût-beauté の文字が、あたかもサインのように刷り込まれてはいるものの、画家の名前やサインは一切記さずにアノニマス（無名）なのが本誌のポリシーなのでもあった。

ポショワール（刷込み法彩色、英語のステンシル）の良さはとりわけ1923年から一層特色を増してくるのであるが、1925年以後になると部数が急増したためか、手作りのイメージが次第に失われ、量産向きの近代的印刷方式が目立ってくる。「婦人グラフ」はその頃の様式を手本にしたもので、たとえば布地のプリントデザインを中表紙に毎号挿入したことなどにも、それが良く現われている。A.G.B.がその中表紙を開始したのは1928年の春からである。

(石山 彰)

『文化女子大学図書館蔵 西洋服飾ブック・コレクション』より修正して転載